

ぐ死や里見らの離脱によって、1930(昭和5)年、
独立美術協会結成をもって事実上解消しました。

小島善太郎資料研究 (1)

小島善太郎は、1930年協会の創立から独立美術協会にかけて、一度も両協会から離れることなく、会員として活動した唯一の画家です。そのため両協会の様々な資料が小島の手元に残されました。美術史上の価値はもちろん、当時の若き画家たちの実際の姿を知ることができる、臨場感あふれた興味をつきないものとなっています。

会員間での手紙や葉書のやり取りのほか、協会展の出品票や画材店や印刷所への支払い証書類、絵葉書などの売上帳や帳簿類、講演会のビラ、チラシの草稿などです。きわめて雑多で、かつ実務的な物が多くみられます。

これは1930年協会発足から独立第2回展を開催した1932年ごろまでの事務局を小島が担っていたためでした。独立第2回展開催の後、駒沢から八王子への転居以降は、事務局は持ち回りで他の会員に引き継がれています。

1930年協会第2回展会員記念写真

1930年協会は同時期にパリへ留学していた前田寛治、里見勝蔵、木下孝則、佐伯祐三、小島善太郎によって1926(大正15)年に結成され、第1回展が開催されました。第2回展以降は公募制を採り、最後の開催となった第5回まで講演会や執筆、研究所での後進の指導を行い、多くの若者に影響を与えました。しかし佐伯、前田の相次



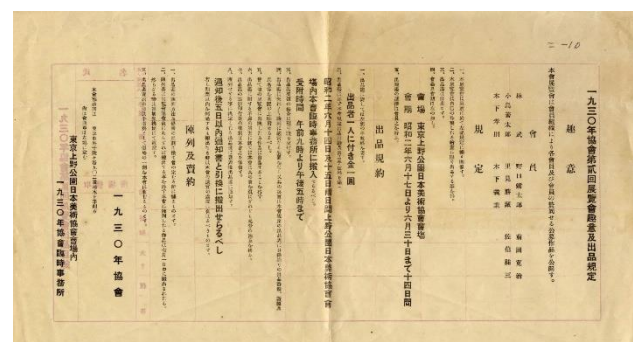
写真は左から小島善太郎、木下義謙、野口彌太郎、佐伯祐三、前田寛治、里見勝蔵、木下孝則、林武。

1930年協会第2回展は1927(昭和2)年6月17日から30日まで、上野公園の日本美術協会(現在の上野の森美術館)で開催されました。

1930年協会第2回展覧会趣意書及び出品規定

1930年協会は第2回展より公募制を採り、応募数約600点を数えました。最後の開催となった第5回展では応募数3,000点を超え、5倍の規模に成長することになります。

裏面には1930年協会第二回展覧会出品目録が印刷され、氏名、画題、大きさ、価格などを記入する欄があります。この出品目録と出品手数料を添えて作品を搬入するよう出品規約に定められています。



1930年協会第2回展絵葉書その他売店帖

1927年6月21日の売り上げ記録。展覧会が17日からの開催で日が浅いためか、印刷された絵葉書はなく、作品写真紙焼き（写真プリント）の売上。この日は前田寛治30枚、木下孝則34枚、木下義謙24枚と前田、木下兄弟の売上が良く、小島善太郎は8枚と苦戦しているのがわかります。

前日	種類	枚数	売上数	代金	枚数
30	林	10	14	.56	26
28	野口	12	14	.56	26
11	前田	29	30	1.20	10
21	小島	9	8	.32	32
29	里見	11	12	.48	27
31	佐伯	9	14	.56	26
16	木孝	24	34	1.36	6
22	木義	17	24	.96	16
	小計	121	158	6.00	
10	研究		5	2.50	5
12	焼附	9	3	.30	18
4	みづ				24
計				8.95	

焼附18枚 事務所へ

ら秋口が江戸前のウナギが良く獲れた時期だそうですが、6月中旬、会期初めの二日間はウナギの注文がありません。ウナギの入荷がまだなかったのかもしれませんが。深読みすれば、入場料や絵葉書売上などを会期三日目頃から当てにできるようになり、値の張るウナギを注文したのかもしれませんが。ちなみに前述「第二回展絵葉書その他売店帖」の21日に絵葉書の売り上げの良かった前田、木村兄弟の三人は翌日そろって「ウナ」を注文しています。作表は筆跡から小島が行ったと思われますが、表の左に「十二半時までにかかぬと注文せぬ夕は四時まで」とあるのは里見が書き加えたものだと思います。

前日	木義	木孝	野口	小島	佐伯	里見	林義	
17	ポロ	ポロ	ポロ	ポロ				17
18	ハッパン	ハッパン	ハッパン	ハッパン				18
19	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ				19
20	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ				20
21	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ				21
22	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ				22
23	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ				23
24	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ				24
25	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ				25
26	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ				26
27	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ				27
28	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ				28
29	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ				29
30	ウナギ	ウナギ	ウナギ	ウナギ				30

1930年協会展第2回展出前注文表

注文表に記された名前と日付から1930年協会展第2回展のものと特定できます。「ウナギ」「うなぎ」または「ウ」「ウナ」と、うなぎかと思われる注文が目につきます。当時の出納簿にもウナギの支払い記録がしっかり残っています。夏か

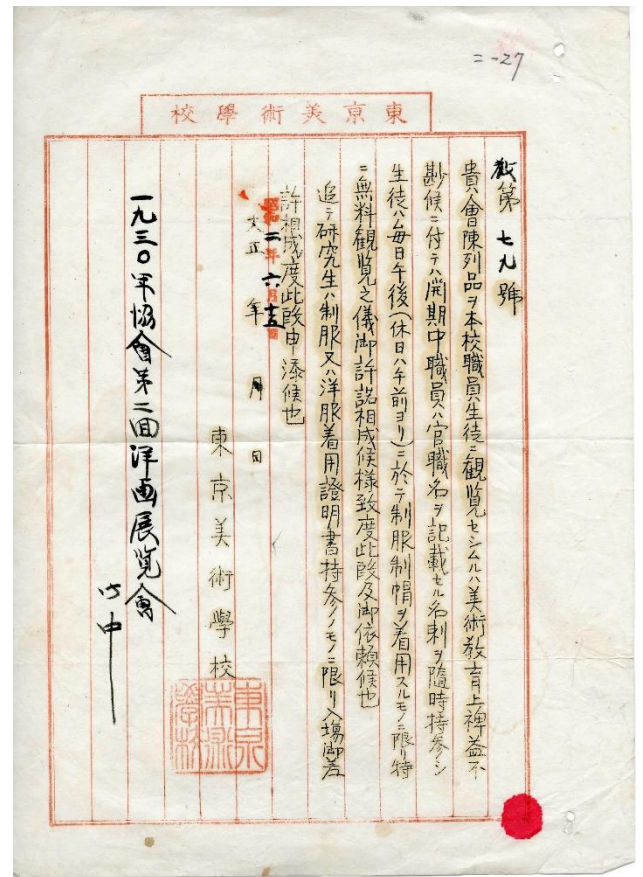
1930年協会金銭出納簿

第2回展開催中の1927年6月20日から25日までの頁。日々の入場料、目録、絵葉書売上の収入から、懇親会関連の収支や、切手、茶菓子、ウナギ弁当の支払いまでの細かなお金の動きを追うことができます。

25 国新券の枚数代(希望)	C 5000	✓ 1000
お茶		✓ 1000
茶菓子代		✓ 1000
切手代(洋子社手裏送附)		✓ 480
送達		✓ 0.90
月銀売上 72枚	3600	
入場	23750	
お茶とパン代		✓ 6900
おはかきお茶代	849	
おくおブック		✓ 400
写真ブック 手帳 附属		✓ 3700

日	摘要	収入金額	支払金額	残高	日	摘要	収入金額	支払金額	残高
20	入場料(500)	500		500	20	国新券の枚数代(希望)	5000		5500
21	お茶		1000	4500	21	茶菓子代		1000	3500
22	茶菓子代		1000	2500	22	切手代(洋子社手裏送附)		480	2020
23	送達		0.90	1930	23	月銀売上 72枚	3600		5550
24	月銀売上 72枚	3600		9150	24	入場	23750		33900
25	お茶とパン代		6900	27000	25	お茶とパン代		6900	20100
	おはかきお茶代		849	19200		おはかきお茶代	849		18351
	おくおブック		400	17951		おくおブック		400	17551
	写真ブック 手帳 附属		3700	13851		写真ブック 手帳 附属		3700	10151

ったことがみてとれます。発番、日付やあて先を書き足して、さまざまな展覧会に依頼していたのでしょうか。また、この書式は「大正」年間に作成されたもので、赤いインクの判子で「昭和 年月 日」と訂正して使い続けています。平成から令和の改元を経験した現代のわたしたちと同じような手間が生じていたかと思うと興味深いです。



1930年協会第二回展無料観覧申請書

東京美術学校（現東京藝術大学美術学部）より1930年協会第2回洋画展覧会あてに発行された、職員、生徒、研究生の無料観覧の許諾を依頼する書類です。「生徒は毎日午後（休日は午前より）」という制限があるのは、授業のサボり防止のためでしょうか。

本文や学校名などは複製された定型の書式であ